中途身体障害者のスポーツへの社会化に寄与する他者に関する社会学的研究：骨肉腫を克服した元車椅子バスケットボール選手の語りから

吉田 毅

Takeshi Yoshida: Sociological study of other individuals contributing to “socialization into sport” of the disabled, based on the narration of a former male wheelchair basketball player who overcame osteosarcoma. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 59: 855-867, December, 2014

Abstract : The purpose of this study was to identify the contribution of other individuals to “socialization into wheelchair basketball” of a man with acquired disability, focusing on the specific meaning of “others” in this context. The author examined the contents of recorded interviews with the subject, who had enjoyed basketball before he developed osteosarcoma. Therefore, this was an example of “resocialization into sport.” This case illustrated the types of other individuals who play a valuable role in helping patients with serious illnesses recover their health and return to participation in sports activities. In this context, the present case can be said to be valuable for other studies.

The other individuals who contributed to “socialization into wheelchair basketball” of the study subject were as follows:

First, until the subject recovered from osteosarcoma, they were the others constructing his “intimate sphere.” That is, they were “irreplaceable others” who gave him a drive to conquer his severe difficulties, “encouraging others” who gave him courage and motivation and “healing others” who provided emotional support. Until the subject was able to apply himself to wheelchair basketball activities, the other individuals were “recruiting others” and “leading others” who attracted the subject to the sport. In addition, they were “associates” in a wheelchair basketball club who supported the subject’s activity and also helped him reconstruct his “intimate sphere” of contacts. These “irreplaceable others” and “associates” were similar to those found in a previous study. Although that study had also noted the importance of “leading others,” those noted in the present study had different meaning. The findings of this study should be of help to persons with various degrees of disability to overcome their difficulties.

Key words : adapted sport, resocialization into sport, specific others, intimate sphere

キーワード : アダプテッド・スポーツ, スポーツへの再社会化, 具象的他者, 親密圏

I. はじめに

「私がここにいるのは、スポーツによって救われたからです。スポーツは私に人生で大切な価値を教えてくださいました」。これは、2013年9月7日に開催されたIOC総会、2020年夏季オリンピック東京招致へ向けた最終プレゼンテーションにお

ける佐藤真海さんのスピーチの一節である。パラリンピアン彼女は大学時代に骨肉腫を患い片足を失ったが、絶望的な自分をスポーツが救ってくれたと語るのである。彼女と同様に、障害に伴う困難を経験する状況でスポーツに救われた中途（後天的）身体障害者（以下「中障者」と略す）がいる（吉田、2009, 2012）。つまり、中障者においてスポーツは、言わば救済装置のごとき貴重

な活動領域となり得る。具体的には、リハビリに限らず楽しみや生きがい、QOLの向上、自立や交際の促進等、様々な意味で有用とみられる。それゆえ、わが国では今後、ますます障害者スポーツを振興していくことが重要である。

そのための手がかりを得るべく、1990年代後半から身体障害者（以下「身障者」と略す）のスポーツ参加の要因を解明しようとする“socialization into sport（スポーツへの社会化）”（Kenyon and McPherson, 1973）に着目した研究が、上述のようにスポーツが貴重な活動領域となった身障者、特に障害者スポーツの花形種目である車椅子バスケットボール（以下「車椅子バスケット」と略す）に励む身障者を対象に行われてきた^{①)}。こうした研究は主に、障害者スポーツ振興に加え障害者理解、また、従来は身障者に限らず障害者を看過してきたスポーツへの社会化研究の発展のためにも意義が認められよう。

藤田（1998）の論考はその端緒とみられる。氏は女性の先天性の身障者を対象に、制度や文化といったマクロ要因と、社会化エージェント等のミクロ要因とが錯綜する社会化プロセスを浮き彫りにし、今後は男性や中障者について検討する必要があると指摘した。こうした課題に応えようとした研究（吉田，2009）では、男性中障者の社会化プロセスは準備局面、つまり障害を負った後にスポーツに参加できる状態になるまでと、その後にはスポーツに参加するに至る主要局面とに大別され、いずれの局面でも特に他者の関わりあいの重要性が認められた。そして、そうした他者は、従来のスポーツへの社会化研究で鍵概念とされていた「重要な他者」^{②)}、あるいは対象者が偶然に出会ったという意味で「何気ない他者」（吉田，2009，pp. 52-55）と見做された。だが、他者とはそもそも多様性に富む（井上・船津編，2005）。それにも拘わらず、上記のような抽象度の高い概念で括ってしまうと、対象者にとっての各他者の意味や重要性の程度等が把握し難いという問題が生ずる。他者について議論する際にはその具象的意味、つまり他者に対する対象者の具象的意味づけに留意することが望ましいのである。

そうした視点に立った研究では、対象者のスポーツへの社会化に寄与した他者として「かけがえない他者」、「導く他者」、それに「仲間」（吉田，2012，pp. 586-590）といった意味の異なる複数の他者が見出された。

しかしながら、上記の研究で対象とされた中障者はわずかであるばかりか、交通事故に起因する中障者に留まる。中障者のスポーツへの社会化に関する研究は緒についたばかりであり、他者に関する知見についても様々なタイプの中障者を対象に蓄積していく必要がある。それにあたり、競技者の困難克服に関する研究（吉田，2001，2006，2012）から示唆されるように、特に重病等をめぐる過酷な困難を経験した中障者を取り上げ、他の中障者等に対し「困難を乗り越えるための手がかりを提供し得る知見」（吉田，2013，p. 9）を得ようとする試みは有意義であるに違いない。本稿でも、そうした「臨床（実践）的にも寄与し得る知見」（吉田，2012，p. 578）を得たいと思う。

以上から本稿は、障害者のスポーツへの社会化に関する研究の一環として、重病を患った男性中障者の車椅子バスケットへの社会化に寄与した他者について、その具象的意味に留意し解明することを目的とする。ここで対象とするのは、骨肉腫を患い長きに亘って闘病生活を送った後、車椅子バスケットによって障害に伴う困難から救われ、それが貴重な活動領域となった男性中障者O氏である。なお、彼の場合は、闘病生活以前はバスケットボール（以下「バスケット」と略す）に励んでいたからスポーツへの再社会化に関する事例と見做される。

Ⅱ. 方 法

対象者が他者をどのように意味づけているかを探るには、対象者へ直接的にアプローチする方法が妥当とみられる。それゆえ、本稿ではインタビュー調査法を用い、対象者の語り（言葉ないし言葉の意味連関）を基に検討する。この方法により、対象者の内面を踏まえつつ車椅子バスケットへの社会化の様相を時間的経過に沿って詳しく捉え得

るであろう。

ただし、インタビュー調査に際しては解釈（主観）をめぐる次の点に自覚的であらねばならない。つまり、「個人的な語りはいかに正確に記録したとしても」、あくまで過去についての「現在の時点からの語り手の解釈」（桜井，2002，p. 39）である点、また、語りの呈示にあたっては上記のような語りを書き手が「さらに解釈」といった「二重の解釈」（小林，1995，p. 69）が不可避という点である。次に、これらの点について考える。

まず、前者についてであるが、本稿は他者を軸とする過去についての対象者の解釈を探ろうとするのである。その際に留意すべきは、対象者の回想による誤謬であろう。ここではそれを防ぐために、インタビューを一定の間隔で複数回に分けて行い、同様の事項でも繰り返し尋ねる必要がある。また、後者については、語りを呈示する際、直に言葉だけを呈示できれば二重の解釈は回避されるが、実際には「語り手による語りはかならずしも明瞭、正確、誠実に語られるとはかぎらない」（桜井，2002，p. 195）。それゆえ、語りを読者が理解できるようにするために、書き手が整序、編集していく手続きがやはり必要であり、結局のところ二重の解釈は避けられないのである。本稿ではこうした点を踏まえ、語りの恣意的解釈（曲解）に留意し、対象者の語りを慎重に扱わねばならない。

では、語りの呈示の仕方はどのようにすべきであろうか。この点については、ライフヒストリー研究の方法論を検討する小林の見解が参考となる。氏は、対象者の語りを呈示する際には「語りの言葉をそのまま活かした部分と〈わたし〉が解説する部分とを交互に重ねて呈示する形式」である「二重奏形式」により、「テキストとして読むことが可能なものになり、他者が理解できるものになる」とともに、読者に対し「リアリティを伝えられる」ようになると指摘する（小林，2000，pp. 106-110）。本稿はライフヒストリー研究と称するわけではないが、語りの呈示に際してはこのように読み易さとリアリティの確保を考慮に入

れ、対象者の言葉とそれを基に筆者が解説する部分とを交えて呈示する二重奏形式を用いる。むしろこの形式は、本稿の目的を遂げるためにも妥当とみられる。というのも、他者に対する対象者の具象的意味づけは、二重奏形式で活かされる言葉として表出されるからに他ならない。その意味でも、語りの呈示にあたっては可能な限り対象者の言葉を活かすように努めるべきであり、また、考察においては言葉に着眼する必要がある。

次に、インタビューの概要を示す。対象者は筆者の知人である車椅子バスケット関係者に紹介して頂いた。対象者に電話で調査を依頼すると快諾して下さった。インタビューは上述のように、一定の間隔で3回に分けて行った。まず、2005年11月に彼の職場で、次に2008年11月に彼の自宅付近の飲食店でメモをとる形で彼の半生を時系列的に尋ねた^{注3)}。更に2012年10月、彼の自宅付近の飲食店で、ICレコーダーに録音する形で過去のデータの確認等を行った。インタビューの時間はいずれも90分ほどであった。初回のインタビューの3ヶ月ほど前に彼の試合会場を訪れ、挨拶するとともにいろいろと言葉を交わしたこともあり、インタビューの際のラポールは当初から良好であった。

以下、語りの呈示にあたっては、「」は対象者O氏の言葉、…は中略、（ ）は筆者の補足を表す。

Ⅲ. O氏の語りの呈示—O氏の略歴—

O氏は中学時代からバスケットに励んでいたが、16歳の時に骨肉腫を患い4年あまりの闘病生活を送った。この間、入退院を3回繰り返し、その後車椅子バスケットに参加するに至った。彼にとって車椅子バスケットはどのようなものであったか。まず、O氏が「これもバスケットだ」と言うように、彼にとってバスケットの代替となり得た。また、自身と似たような境遇の身障者が集う車椅子バスケットの世界では、退院後の「普通の生活」で不可避であった「バリア」を感じなかった。そのため「違和感」がなく「自然な姿でいられた」。更に、

車椅子バスケットを行う際には「汗がかけた」。彼は闘病生活を送るようになってから運動で汗をかく機会がなかったため、「何年振りか」の「快感」であった。しかも車椅子バスケットに参加することにより、16歳で途絶えた「青春時代」を「引き戻せる」と感じたと言う。それまでは「青春」を「失くしたショック」があった。かくして車椅子バスケットは、彼にとって「人生の軸」となり得る貴重な活動領域となった。では、そうした車椅子バスケットに励むに至るまでのO氏の略歴を示す。

1. 骨肉腫発症まで

O氏は1971年4月、I県T市に2人兄弟の次男として生まれた（2歳違いの兄が1人）。両親（父は営業職、母は専業主婦）と4人家族であった。生後、間もなく同県Y市に転居した。幼少期から「自分勝手」な面があったが「統率力」もあった。「運動は好き」で、「外で活発に遊び回るタイプ」であったと言う。

小学校に入学すると、クラスではリーダー的存在となり学級委員に選ばれる年もあった。4年時に兄の影響を受けて剣道少年団に入った。「初めの頃は防具をつけるのが面倒」に感じていたと言うが、当初より競技力が優れており、入団4ヶ月後には早くもY市の大会で同学年3位となった。その後も稽古に励み、中学1年時には初段を取るに至った。剣道少年団では中学3年の半ばまで活動を続けた。

その一方、中学校では兄に誘われバスケット部に入った。「小学生の頃からサッカー部に憧れていた」が、「サッカー部は不良が多かったから入部を断念した」とO氏は言う。入部後は、剣道よりもバスケットにウェイトを置くようになった。バスケット部は指導者がいるわけではなく、「生徒だけで頑張る状況」であった。そんな中、O氏は「勉強もそこそこに部活に没頭した」。走りこみ等の自主トレにも取り組んだ。2年時から副キャプテンを務め、3年時には県大会でベスト8に入った。バスケットに打ちこむ中で「夢中になることの尊さを覚えた」と言う。

高校は志望通り、「バスケットの強豪校」私立

S高に進学した。入学後も部活に打ちこみ、充実した高校生活を送った。ところが1年時の初冬、「足に痛みを感じるようになった」。暫くはバスケットができないほどの痛みではなかったが、それは徐々に強くなっていった。「年が明けて三が日が過ぎた頃に激痛」に襲われ、「夜にはうなされて眠れないほどの状態」になった。鎮痛薬を飲んだが、あまり痛みは緩和しなかった。翌日、近所のM整形外科で診察してもらおうと「骨髄炎」とのことであった。「1週間ほど痛みをこらえてバスケットの練習を続けた」。しかし、痛みは一向に治まらなかった。M整形外科の医師から地元の大学病院を紹介してもらった。今度は「骨肉腫」と診断された。

2. 最初の入院から復学まで

間もなく県立がんセンターに入院した。その後O氏は、この時を含め3回の入院生活を送る（2回目は18歳の初冬から翌年春、3回目は19歳の冬から20歳の夏前）。いずれもがんの転移による。

がんセンターでは、3週間に1回のペースで抗がん剤治療と検査を受けたが、病状は変わらなかった。3月になると「足を切断するか人工関節をつけるか」決断を迫られた。「感染し易いといったリスクはある」ものの、O氏は「そもそも足を切断するっていうことが、受け入れられないというか考えられなかった」と言う。「足を残す選択肢があるなら、もちろんそうするよ」と「人工関節を選択した」。手術後はリハビリを続けながら、5回の洗浄手術を施された。O氏はこの間の心境を次のように回顧する。

【語り1】「苦しかったですね。何か、学校に戻らないといけないという、そのプレッシャーというか、その気持ちと、苦しい抗がん剤との、何かこう行ったり来たりでしたね。…学校についていけなくなっちゃうとか、バスケットをできなくなっちゃうとか…何か（不安が）すごい強かったですね」。

こうした「不安」や「苦しみ」と「一緒に闘っ

てくれた」のが「T 先生という主治医の先生」であった。T 医師について O 氏はこう語る。

【語り 2】「本当に熱血、情熱的で…すごい厳しかったです、僕には。…ちゃんと勉強しろとか…生活面ではすごいきちっとさせようとする、妥協を許さないぞみたいな。…子どもらしく、学ぶことは学びなさいっていうような、何かそういう、先生的な目線もしっかり持っている方で…厳しくどんどん攻めてきた人ですね。甘やかしてはくれなかったです。…この病気に対して徹底して挑戦してたというか…どんどん煽ってくるっていうか、弱ってる暇ないぞっていう。…闘っていく勇氣と力を与えてくれた」。

他方で、入院生活の当初から「支えてくれたのは…I さんという女性の看護師さん、最初に出会った看護師さん」であった。彼女については次のように語る。

【語り 3】「一番衝撃的に重要だったのは、彼女です。…頼りになる女性だったんですよ。…25, 6 だったかな。…すっごくいい女性で、まあ話すトーンとかも、気のつけ方というか…本当に有難いところにいつも気がつけるっていう。…何かあったら、I さんに何でも相談するというか、自分のわがままだったり、自分の甘えだったり、自分の興味だったり。…癒しの存在ではありましたが、間違いなく」。

I 看護師とは別に、O 氏が「すごい好きになった」という看護師 K さんもいた。彼女は「(入院中の) 後半とかは…すごい僕の支えになってくれた」のである。「(O 氏を) 車で連れ出してくれたり」する時もあり、「僕が一方向的に…恋心を持って、甘えてた存在」であったと言う。

このように医療スタッフに恵まれた O 氏にとって、闘病生活を送るにあたり家族はどのような存在であったのか。

【語り 4】「父親と母親と(受験勉強中の) 兄

と、その 3 人が基本的な、多くの支えになっていったっていうか…何でもやってくれてた人達でしたね。…空気のようにいつでも支えになってくれる人達っていうか。…うちの家族は…何かチームワークっていうのがありましたね。…よくやってくれたなって思います。…僕が、何かこう寂しくなるとか、心苦しくなってどんどん弱くなっていけないように、いつもいるっていう、支えの存在になってくれましたね。だから僕は実はあんまり落ちこんだりしなかったんです。この病気を治すためにやることやろうぜっていう、(そのために) 助けてくれよっていう、何かいつも強気なラインを、なぜか保ってたんです」。

O 氏は家族と医療スタッフとの関係について、「やっぱり青年期だったので…先生と、支えてくれる看護師と、家族と、やっぱり恋をする人っていう…菱形が大切でした」と表現する。ただし、そうした「菱形」の中で最も「大きな位置を占める」のは「母親」であった。母親について、彼はまずこう語る。

【語り 5】「(退院してから聞いた話では) 母親とかは…こんな病気になって死ぬかもしれないと思って必死だったんですけど、僕は何かもう、当然だろみたいな。…もうわがまま放題させてもらいましたね」。

翌年 1 月には退院し、4 月に復学した。再び高校生活を送るにあたり、O 氏の自宅付近の高校に通っていた「中学の親友達…バスケット部の 3, 4 人」が自宅に立ち寄ってくれることが度々あった。「本気で心配してるっていうか…心を通わせた」と言う。だが、それも束の間であった。事態は暗転する。

3. 2 回目の入院から普通の生活へ

復学して半年ほど過ぎると「(がんが) 右肺に移転した」ことが分かった。12 月に再入院し、「半年間の抗がん剤治療」を受けた。この間、11 時間にも及ぶ人工関節のローテーション手術も施

された。I看護師は「2回目の入院か3回目の入院」（この点はO氏の記憶が定かではない）の時には「異動」していたが、その後は「（彼女を）代用していく人達が現れて」きたとO氏は言う。彼は翌年春に退院した。

退院して間もなく「義足を使って自動車教習所に通い始めた」。年が変わり、次なる生活に備えようとしていた矢先、今度は「（がんが）左肺に転移した」ため3回目の入院となる。この時はI看護師も「恋心を持っていた人」も「異動」していたが、「1回目に新人だった人達」が「かなり力をつけた頃」で「頼り」になったと言う。「皆が（自分を）何とかしなきゃ」と、「一緒に生活しているよう」に手厚く世話をしてくれた。

しかし、この際には更に大変な事態が起こった。母親もがんの再発で別の病院に入院したのである。O氏は「（母親の）状況をみたら、よくないな」と思った。彼自身も「むちをバンバン打たれて、もう疲れきった身体」で「肝臓がギブアップ寸前」であったが、「自分が死ぬとか、自分がだめだっていうことは、男としてあり得ない」と「かなり奮い立った」。O氏は、この際の母親への思いをこう語る。

【語り6】「母親は献身的に僕の世話というか看病してくれて、日々僕も自分勝手に、あれしろこれしろと言ったりしてたわけですよ。で、例えば自転車も乗れない母親が…（O氏の看病に通う便宜上）車の免許を取ろうとかって言って…だけど、車の運転なんて泣いちゃうくらい怖い、で泣きながら（頑張っても）、仮免許に落ちてですね、差し入れ持っていきながら先生にこう、おべっかを使いながら何とか通してもらおうみたいなことをして。多分落ちた数が過去最高じゃないですかね、そこの教習所で…（それでも）何とか取って、みたいなことをしながらも、僕を献身的に支えてくれた母親が…死にそうだということに対して、男として、お前はどうかんだと思ったわけですよ。…このまま母親が死んでしまうことを、僕はさせてはいけない。つまり僕が助かれれば、もしかしたら母親が助かるかもしれない…僕が死ぬって

ことを自分が思うことほど、最低なことはいないみたいな、何かそんな感情に辿りついて、もの凄く力強くなったというか、何があろうと絶対に死なないんだと、絶対に治すんだと…どんな恐怖も、全部乗り越える、覚悟みたいなエネルギーがウワッと湧いてきたんです」。

こうしたO氏の精神状態の変化はT医師も感じていた。O氏は「（退院して）10年後ぐらい」にT医師と会った際、「もう手がなかった」のに「本当に強かったね」と感心されたと言う。T医師は「もう難しい…これ以上進んだらもうアウトだ」と親に伝えていたが、O氏はそこで持ちこたえたのである。

そんな中、父親と兄も大変だったろうとO氏は振り返る。父親は2つの病院を「行ったり来たり」であった。「（2人の看病のために）仕事を辞めるという決断」をしたが、会社の配慮により有給扱いで長期の休暇を取ることができた。大阪の大学に入った兄は「複雑だったと思う」が、「（どんな状況でも）自分でやることはちゃんとやりなさい」という「家の方針」もあり、「大学を疎かにしたらいけない」と頑張っていたと言う。「たまに輸血とか僕が必要になると、大阪から飛んで来て」輸血に協力してくれた。

O氏は夏前に退院した。「（母親のためにも）自分がしっかり助からない」と意を決し、療養のため長野県の自然豊かな環境にある祖母宅に暫く滞在することにした。この間、勉強やアルバイトも行った。翌年春に帰宅し、その後は勉強しながら父親と交替で母親の看病を続けた。同時に車椅子バスケットに励むようになる。

4. 車椅子バスケットへ

O氏は入院中、同年代の女性Nさんと知り合った。彼女も骨肉腫で同じ病院に入院していた。O氏が車椅子バスケットに参加するにあたり、仲介役となったのが彼女である。彼女はO氏よりも早く退院したのだが、その後に車椅子バスケットHクラブの女子マネージャーと「（障害者関係の）何かでつながったんだと思う」と彼は言う。「そのマ

ネジャーも義足」であった。O氏が祖母宅での療養を終えて帰宅すると、程なく女子マネジャーから電話がかかってきた。Hクラブへの勧誘の電話であった。彼女は「(Hクラブでプレーできそうな)若い選手を探して」おり、NさんからO氏がそれに該当すると聞いたとのことであった。

しかし、本格的にバスケットを行っていたO氏には「プライド」があった。彼は、車椅子バスケットは「リハビリでやるもので、レベルは低いのでは…そんなのできないよ」と思った。実際に車椅子バスケットをみるまでは「上から目線」であったが、Hクラブの練習場所が自宅から近かったため、やがて1人で「軽い気持ちでみに行っただけ」。すると、「いやこれもバスケットだ」と思った。「すごい印象的」なプレーを目の当たりにしたのである。

【語り7】「こいつと一緒にやりたい、僕バスケットやってたので、あ、こんなプレーヤーと一緒にやりたいなっていうセンターがいたんです。…Zです、Zがいて、で、この人うまいなっていうMさんが方がいたんです。で、この2人が…誘導していく2人だったんですよ。こんな風になりたい、こいつと一緒にやりたいっていうことを思わせてもらえた」。

練習後にメンバーに紹介されると、メンバーがいろいろと話しかけてくれた。この際の様子と自身の思いをO氏は次のように語る。

【語り8】「ちょっとふざけた感じで、お前義足なんだ、いいねーじゃー重宝するねーみたいなことを言ったりとか、これできんのあれできんのみたいな、すごいフレンドリーなレベルで、いろんな話が進んでゲラゲラ笑えた…今まで、どうしても自分で虚勢をはっていたというか、殻をかぶっていた…障害を悟られないようにしようとか…自分をどう解放していいか分かんなかった中で、全て解放する場所ができたっていうのが、何しろ大きいですね」。

「普通の生活」では「バリア」があったが、「こ

こは唯一バリアがなかった」とO氏は言う。Hクラブでは「違和感」がなく「自然な姿でいられた」のである。翌月から練習に参加した。O氏が車椅子バスケットに励むようになるのに時間は要らなかった。彼は闘病生活に入ってから運動で汗をかく機会がなかったが、車椅子バスケットでは「汗がかけた」と言う。「快感」だった。「汗かいて、必死に頑張っただけで何かこううまくいって…(そんな)プロセスが、やっぱりもう何よりも、代え難い…しがつきたい」という思いが強くなった。「中途半端に終わってしまった」という「青春時代」を「引き戻せる」と感じた。また、O氏は次のようにメンバーにも恵まれた。

【語り9】「Sさん…僕を温かく見守ってくれて、例えばご飯食べに来いとか、何かすごい面白い話を一杯してくれたりとか、本当に何かこう、(O氏の目線まで)下りてきてくれて、いろんなことを教えてくれたのがSさん。…僕と同一歳なんですけどAとTっていうのがいて…(彼らは)一緒に遊ぶ仲間だったというか…そういう仲間がいて、何か1つの輪が出来上がっていた感じですね。…もちろんこの人達も一緒にチャレンジしてるんですけど、まあ心の拠り所というか…何でも相談したり、愚痴を言ったりとか…いつも練習につき合ってくれたりとか…高め合っていくっていう部分での支えになってくれた」。

「Z」や「Mさん」のような「誘導していく」メンバー、「Sさん」や「AとT」のような「仲間」、いずれかが欠けていたら車椅子バスケットを前向きに続けていく気には「なれなかった」とO氏は言う。

【語り10】「気軽に遊べるやつがいて、先輩に育てられて、で、目指す、憧れる存在がいたのが、(車椅子バスケットに)自分を駆り立てた。…この存在があったからこそ自分を100%そこに、注ぎこめたというか。やっぱり何かコンプレックスとかそういうものも、普段ある中で、100%注ぎこめる場所がなかったんで」。

O氏はすぐにレギュラーになることはできなかったが、「本能的に、当然のように向上心を持って練習しました」と述懐する。「日本一になること」を目標に、夜にも自主トレを行った。暫くは「24時間バスケット」の生活を続けた。闘病中の母親に「パラリンピックに出る」と誓ったが、翌年夏に母親は他界した。その矢先、不思議なことにO氏の肺にずっとあった「(がんの)影が、母親の死とともになくなっていた」と言う。「3ヶ月に1回の検診」を受けるだけで済むようになった。秋には、補欠ではあったが初めて「国体(正確には全国身体障害者スポーツ大会)」に出場した。

そんな中、O氏は「(ずっと)車椅子バスケットにどっぷり入っていくことにはならなかった」と言う。「英語をベースに世界で活躍する」という夢や、「いろんな文化に触れたい」という希望も抱いていた。車椅子バスケットに励みながらも、将来へ向けて英語等の勉強にも本格的に取り組むようになっていった。母親が他界した翌年、アメリカへ留学した。

しかし、アメリカに渡って半年ほど経つと、再び車椅子バスケットの世界に「自分から飛びこんだ」と言う。O氏にとって車椅子バスケットは「人生の軸」となっていた。彼は現地のコミュニティカレッジに通いながら、本場のクラブで車椅子バスケットの研鑽を積み帰国に備えた。4年ほどの留学生活を終え帰国すると、程なくHクラブに復帰した。その後は車椅子バスケットに励むとともに、その普及活動にも取り組んだ。数年後には日本代表の座を勝ち取り、母親に誓ったパラリンピック出場を果たした。

Ⅳ. 考 察

冒頭で述べたように、O氏は骨肉腫を患うまでバスケットに励んでいたから、彼の車椅子バスケットへの社会化はスポーツへの再社会化と見做される。先行研究(吉田, 2009)では、対象者の車椅子バスケットへの社会化プロセスを準備局面と主要局面とに大別しているが、O氏の場合はどうであろうか。彼の闘病生活は祖母宅での療養期間を含め4

年あまりに及んだのであるが、彼の語りからは、この間に彼は車椅子バスケットへ参加するために何らかの準備を行ったわけではなく、あくまで療養に努めたとみられる。それゆえ、本稿ではこの4年あまりの期間を療養局面と、その後にO氏が車椅子バスケットに励むに至るまでを車椅子バスケットへの社会化局面(以下「社会化局面」と略す)と呼ぶことにする。いずれの局面でも種々の他者が貴重であったと言えるが、各局面における他者はどのように捉えられるのか次にみていく。なお、以下でも、前述のようなO氏の言葉は「」で示す。

1. 療養局面における他者

まず、最初の入院生活の際のO氏の「不安」や「苦しみ」が【語り1】から分かる。彼の闘病生活は過酷であったに違いない。その後の語り(【語り5】まで)によれば、彼が骨肉腫と闘っていくのに寄与した他者はT医師、I看護師、K看護師、それに家族が主であったと言える。「菱形」を構成するこれらの他者は、いずれも彼にとって、重要な他者であったと捉えることはできる。冒頭で述べたように、先行研究(吉田, 2009)でも対象者の車椅子バスケットへの社会化の準備局面に寄与した他者を重要な他者と見做しているが、上記の他者をそうした抽象度の高い概念で括ってしまうと、O氏にとって明らかに異なる各他者の意味が把握し難くなる。やはり具象的に捉えることが望ましい。

そうした視点からO氏の語りをみると、さしずめ彼の周りには家族ならびに医療スタッフといった2つの親密圏が築かれ、各々が彼の闘病に寄与したと言えよう。もとより「親密圏」とは、ハーバーマスが愛に満ちた近代的な「小家族」を指して描いたのである(ハーバーマス, 1994, pp. 64-72, pp. 207-231)。しかしながら、現代においては家族の危機や崩壊が叫ばれており、家族が親密圏に該当しない者や、親密圏を家族以外に求める者も稀ではない。そのため、社会学では概ね2000年以降、親密圏の今日的な捉え方に関する議論が活発化しているが(山田, 2005; 上

野, 2009), スポーツ研究領域において親密圏に関する議論はほとんど行われていない。そうした中, 齋藤は親密圏について「グループ・ホームや自助集団など」の「新しい諸形態が現につくりだされつつある」と広義に捉え, 「具体的な他者の生への配慮/関心を媒体とするある程度持続的な関係性」(齋藤, 2008)と定義している。このような, 親密圏を家族に限定しない齋藤の定義は今日的に妥当とみられ, 上述のように医療スタッフ等も親密圏と捉え得る^{注4)}。

とはいえ, 【語り4】のように, O氏にとって家族は「チームワーク」があり「空気のようにいつでも支えになってくれる人達」であった。彼の闘病生活は, 過酷な困難を経験する者において家族が強力な親密圏として大きな支えになり得ることを窺わせてくれる。ただし親密圏は, 重要な他者と比すれば具象的な面があるものの, あくまで『親密性』が展開する場ないしは空間(野口, 2013, p. 194)と捉えられるから, 複数の他者をそのように括るだけでは各他者の更なる意味的な差異を見出すことはできない^{注5)}。他者の具象的意味に留意する本稿では, 歩を進めて各他者に目を向けねばならない。

O氏にとって, 家族は皆が貴重な存在であったが, 特に母親は「当然」のように「わがまま放題」が許される特別な存在であったとみてよい(【語り5】)。それについては【語り6】に詳しく示されている。母親は, 闘病生活の終盤には「もの凄く力強くなったというか。何があろうと絶対に死なないんだと, 絶対に治すんだと…どんな恐怖も, 全部乗り越える, 覚悟みたいなエネルギー」の源泉となったのである。この際に母親も深刻な状態になったことは看過できないが, 自身の看病のために苦勞して車の免許を取得するなど, 「献身的に支えてくれた」母親に対するO氏の思いはもとより強かった。彼は母親を状態に拘わらずかけがえのない存在と認めていたとみてよい。O氏にとって母親は, 先行研究でも見出された「かけがえのない他者」(吉田, 2012, p. 586)と捉えられる。これは, 過酷な困難を克服するために必要な気力の源泉となる代わりなき他者である

(吉田, 2012, pp. 586-590)。T医師も感じていたように, O氏は命の瀬戸際に旺盛な気力を発揮したようであるが, かけがえのない他者である母親がそれを可能にしたと言える。

他方で, O氏は医療スタッフにも恵まれた。T医師, I看護師, K看護師といった医療スタッフも, O氏にとってのもう1つの親密圏を築いていたとみられる。通常の医療行為がどの程度まで含むのかは別として, 3者に関するO氏の語りから, 各々の彼に対する接し方はかなり親身なものであったと言えよう。ただし, 各他者に目を向けると, 各々が意味的に差異を有していたことも明らかである。次にこの点についてみる。

【語り2】に示されるT医師は, 当初より「勇気と力を与えてくれた」のであり, I看護師は【語り3】のように, 情緒的な支えと言うべき「癒しの存在」となった。文字通り, 前者を力づける他者と, 後者を癒す他者と呼ぶことにする。また, K看護師は, O氏にとって「恋心」を抱いたという点でI看護師とは異なる存在であったが, 意味的には同様に癒す他者の類であったとみてよいだろう^{注6)}。これらの他者は先行研究では捉えられていないが, 該当するのが医療スタッフであるか否かに拘わらず, O氏のように過酷な闘病生活を送る者においては言わば車の両輪のごとく貴重な存在であるに違いない。

なお, 2回目の入院以降, 上記の2人の看護師は異動したが, O氏が言うように「代用していく人達が現れて」きたのであった。力づける他者とともに, 特定の他者ではないものの癒す他者に準ずる「人達」も最後の入院生活までいたとみてよい。

以上のように, O氏は2つの親密圏を構築する上述のような貴重な各他者を得て闘病生活乗り越え, 療養局面に終止符を打った。

2. 社会化局面における他者

次に社会化局面についてみていく。O氏は闘病生活を終えたものの, 【語り8】に「障害を悟られないようにしようとか…自分をどう解放していいか分かんなかった」と, 【語り10】には「コン

プレックスとかそういうものも、普段ある中で、100%注ぎこめる場所がなかった」とあるように障害に伴う困難を経験していたとみられる。これには、前節の冒頭で述べた「汗」や「青春」といった点も含まれよう。そうした彼にとって、やがて車椅子バスケットが救済装置のごとき貴重な活動領域となる。

まず、O氏は療養先から自宅に戻った矢先、Hクラブマネージャーから勧誘を受けた。彼女は誘う他者と呼ぶより他はない。言うまでもなく、当該活動（方向）へ勧誘する他者である。そして、O氏はHクラブの練習をみに行った際、Z氏とM氏のプレーに惹かれたのである。両者は意図的ではないものの、O氏に「これもバスケットだ」と、車椅子バスケットがバスケットの代替になり得ると気づかせてくれたとみてよい。O氏がスポーツへの再社会化の方向へ向かい得たのは、かつて行っていたスポーツに見合う価値（効用）を、新たに関わるスポーツに見出したからであったと言える^{注7)}。その意味でも、O氏にとって両者が貴重な存在であったことに疑いを挟む余地はない。では、両者はどのような他者と捉えられるであろうか。

Z氏とM氏は、【語り7】にあるように「こんなプレーヤーと一緒にやりたい」と思わせてくれる「誘導していく2人」となった。【語り10】には「憧れる存在」とも表現されている通り、O氏にとって役割モデルのごとき存在であったとも言えよう。先行研究では対象者が、親密圏に該当するとみられる1人の「導く他者」、つまり「困難克服の方向を定めるべく能動的に配慮を施してくれる他者」（吉田，2012，p. 587）から車椅子バスケットに誘われ導かれて困難を克服していく様子が捉えられている。上記のような導く他者は誘う他者を兼ねていたのである。しかしながら、O氏において誘う他者は前述の通りであるから、それとZ氏、M氏は区別して捉えるべきである。また、彼の語りから、両者は上記の意味での導く他者に該当するとは言えないが、結果としてO氏を車椅子バスケットに導いたのは確かである。それゆえここでは導く他者を敷衍し、意図的（能動的）にせよ無意図的にせよ当該活動（方向）へ惹きつ

ける他者と定義し直す。その上で、両者も導く他者と呼ぶことにする。

次に、O氏が車椅子バスケットへの社会化を遂げていくのに寄与した他者についてみていく。前述のように、彼は「汗」や「青春」といった点でも車椅子バスケットに救われたと考えられるが、その前提としては【語り8】のように、彼にとってHクラブが「虚勢」をはらず「殻」をかぶらず「全て解放する場所」となり得た点が挙げられる。それが「何しろ大きい」のである。Hクラブで彼は、退院後の「普通の生活」で不可避であった「バリア」を感じる機会や「違和感」がなく「自然な姿でいられた」。障害に伴う困難から救われたとみてよいが、O氏にとってHクラブが貴重な居場所となったのも、結局のところ次のような他者による。

つまり、先輩のS氏、同年代のA氏とT氏は、当初より新たな親密圏を築く貴重な他者であったとみられる。O氏においては前述のように、入院中にも親密圏が築かれていたのである。このような、個人のライフコースで断続的に築かれる親密圏については従来、社会学において実証的に捉えられることはほとんどなかった。上記の3者をより具象的にみると、【語り9】にあるように、S氏は「僕を温かく見守ってくれて…いろいろなことを教えてくれた」のであり、「同い歳」のA氏とT氏は「一緒に遊ぶ仲間」であるばかりか、彼らを軸に「1つの輪が出来上がっていた」。しかも両者は「心の拠り所というか…何でも相談したり、愚痴を言ったりとか…いつも練習につき合ってくれたりとか…高め合っていくっていう部分での支えになってくれた」のである。3者は正に、先行研究でも見出された「仲間」（吉田，2012，p. 589）と捉えることが妥当である。これは、当該活動に共に取り組むサポート役と言えべき他者に他ならない（吉田，2012，pp. 588-589，2013，p. 226）。

かくしてO氏は車椅子バスケットに精力を注ぐようになったのであるが、その要因となった上記の他者について「気軽に遊べるやつがいて、先輩に育てられて、で、目指す、憧れる存在がいた」と

まとめて語る（【語り10】）。彼は導く他者によって惹きつけられ、また仲間という親密圏に支えられ車椅子バスケットへの社会化を遂げていった。「青春時代」を「引き戻せる」との思いの下、当初は「24時間バスケット」の生活を送ったのである。その後、彼は「車椅子バスケットにどっぷり入っていくことにはならなかった」ものの、留学してからも結局は車椅子バスケットから離れられなかった。それどころか車椅子バスケットに「自分から飛びこみ」、再び打ちこむに至ったのである。O氏において、車椅子バスケットは「人生の軸」となる貴重な活動領域となった。そうした車椅子バスケットへの社会化に寄与した他者の意義は非常に大きい。

V. ま と め

骨肉腫を患い長きに亘って闘病生活を送った後、車椅子バスケットによって障害に伴う困難から救われ、それが貴重な活動領域となった男性中障者O氏を対象に、彼の車椅子バスケットへの社会化に寄与した他者について、その具象的意味に留意し説明することを試みた。本稿で取り上げた事例は、従来はみられない類であり、命に関わる病と闘いスポーツに参加するに至るまでにはどのような他者が貴重であるかを窺わせてくれるものであった。語りの呈示にあたっては、できる限り対象者の言葉を活かすように努めた。それゆえ、本稿は他の研究でも資料的価値が認められ、他の事例との比較検討等に用い得るのではないと思われる。次に、本稿の考察で得られた、O氏の車椅子バスケットへの社会化に寄与した他者についてまとめる。

まず、療養局面では、当初より家族ならびに医療スタッフといった2つの親密圏がO氏の闘病に寄与した。より具象的には、家族の中でも特に母親がかけがえのない他者として、O氏が闘病生活の終盤に旺盛な気力を発揮するのに大いに寄与した。また、医療スタッフにおいては、T医師が闘病のための勇気と力を与えてくれ、2人の看護師が情緒的に癒してくれた。文字通り前者は力づける他者と、後者は癒す他者と称された。な

お、上記の看護師が異動した後にも、特定の他者ではないが癒す他者に準ずる医療スタッフは存在した。続いて社会化局面では、まず、HクラブマネージャーがO氏を車椅子バスケットへと誘う他者となった。そしてZ氏とM氏は、意図的にはないにせよO氏を車椅子バスケットに惹きつけたという意味で導く他者と捉えられた。更に、新たな親密圏を築いたS氏、A氏、T氏は、O氏の車椅子バスケット活動を支えてくれたのであり、当該活動に共に取り組むサポート役と言うべき仲間と捉えられた。

こうした中で、親密圏に関する知見はいずれもスポーツ研究領域では新たなものであるが、個人のライフコースで断続的に築かれた親密圏という側面は社会学でも従来ほとんど捉えられることはなかった。より具象的な他者については、かけがえのない他者および仲間は先行研究で見出された各々と同様であったが、力づける他者と癒す他者は新たに見出されたものである。過酷な闘病生活にはかけがえのない他者に限らず、上記の両他者も車の両輪のごとく貴重な存在とみてよい。また、誘う他者と、先行研究とは異なる意味での導く他者も新たに見出された。先行研究で認められた、中障者に配慮し意図的に誘い導くという意味での導く他者だけが社会化の方向を定めるのに寄与し得るわけではない。このように本稿は、先行研究に比して中障者のスポーツへの社会化に寄与する多様な他者を浮き彫りにした。とりわけ上述のように新たな知見が得られたという点で学術的に意義が認められるばかりか、総じて他の中障者等の困難克服のための手がかりとなる臨床(実践)的にも有意義な成果をあげることができたと言える。

最後に今後の課題について述べる。まず、本稿は限られた事例について検討したに留まるため、ここで得られた他者や親密圏に関する知見の検証を他の事例を対象に重ねていくことが求められる。また、冒頭で触れた障害者スポーツ振興や障害者理解、それに障害者を含むスポーツへの社会化に関する研究領域の発展のためには、中障者に限らず様々なタイプの障害者や種目を対象に研究

を蓄積していく必要がある。それにあたっては、かつての社会化研究が陥った“catchall（がらくた入れ）”（McPherson, 1986, p. 117）のごとき無秩序状態を呈してはならない。秩序立った体系的な知見を得るべく、個別的、恣意的に研究を進めるのではなく、先行研究を踏まえながら対象者や対象種目、分析視点や方法論等を定め、連関的に研究を進めていくことが求められる。

追記

本研究はJSPS 科学研究費23500750の助成を受けたものである。

注

注1) スポーツへの社会化とは、この研究領域の先駆者 Kenyon and McPherson (1973) によれば、個人があるスポーツ役割を学習、取得していくプロセスである。表現を換えれば、個人があるスポーツに習慣的、継続的に参加するようになるプロセスである。なお、スポーツ社会学の分野で車椅子バスケットを対象とした一定の研究成果としては渡 (2012) の論考が挙げられるが、これは問題意識も視点も本稿とは異なるものである。

注2) 「重要な他者」とは「意味ある他者」と同義であり、「主として心理的な意味において高い重要性を付与された他者」(後藤, 1988) を意味する。

注3) ここでは予め基本的な質問内容を用意し、対象者の回答に柔軟に対応していく半構造化インタビューを行った。対象者の幼少期、小学・中学・高校時代、骨肉腫の発症から闘病生活、車椅子バスケットとの出会い、そして車椅子バスケット継続の様子について、他者関係性はもとより全般的な生活状況に留意しつつ時間的経過に沿って尋ねた。各インタビューを一定の間隔で行ったことで、対象者の回想による誤謬を防ぎ得たとみられる。

注4) 齋藤は政治学の研究者であるが、氏の定義は分野を問わず有効とみられ、社会学でもこれに依拠した論考がみられる。そうした主な論考として高谷 (2009, 2012) が挙げられる。氏は、わが国で非正規滞在移住労働者を組織化してきた全統一労働組合が、そうした労働者にとって親密圏の位相を有する点について論じた (高谷, 2009)。更に氏は、在日フィリピン人女性への支援を行う NGO を親密圏と位置づけ、それと彼女らの家族との関係性について論じた (高谷, 2012)。本稿でも目的

を遂げるために齋藤の定義に依拠するに留まるが、わが国では親密圏が着目されるようになってからまだ日が浅いため、この概念それ自体の検討も進めていく必要があろう。

注5) 野口 (2013, p. 194) によれば、親密圏に関する議論は『親密性』それ自体ではなく、『親密性』が展開する場ないしは空間を分析の焦点にする点に「特徴がある」。

注6) 社会学では今日、看護も含むケアに関する議論が活発化している (庄司, 2013)。ケアは『世話』『気配り』『心配』などの意味をもつ (庄司, 2013, p. 1) ことから、看護師は親身になって患者を癒すことが当然とする向きもあるが、感情労働の観点からみるとそう単純なものではないと言える (崎山, 2005 ; 三井, 2006)。あらゆる看護師が癒す他者と捉えられるのであれば、むしろここで両者を癒す他者と称する必要はないだろう。力づける他者についても同様である。

注7) むろんスポーツへの再社会化が全てこうしたケースというわけではないだろう。例えば、青少年期に勝利を重んじて競技スポーツに励んでいた者が、中年期にはレクリエーション的なスポーツにメタボ予防のために参加する等、新たに関わるスポーツに、かつて行っていたスポーツとは異なる価値を見出すことでスポーツへの再社会化へ向かうといった O 氏とは対照的なケースもあるに違いない。

文 献

藤田紀昭 (1998) ある身体障害者のスポーツへの社会化に関する研究—車いすバスケットボールプレイヤーの個人史より—。スポーツ社会学研究, 6: 70-83.

後藤将之 (1988) 意味ある他者。見田宗介・栗原 彬・田中義久編, 社会学事典。弘文堂: 東京, p. 58.

ハーバーマス: 細谷貞雄・山田正行訳 (1994) 公共性の構造転換。未来社: 東京。〈Habermas, J. (1962) Strukturwandel der Öffentlichkeit. Luchterhand: Neuwied.〉

井上 俊・船津 衛編 (2005) 自己と他者の社会学。有斐閣: 東京。

Kenyon, G.S. and McPherson, B.D. (1973) Becoming involved in physical activity and sport: A process of socialization. In: Rarick, G.L. (Ed.) Physical activity: Human growth and development. Academic Press: New York. pp. 304-333.

小林多寿子 (1995) インタビューからライフヒストリー

- へ、中野 卓・桜井 厚編、ライフヒストリーの社会学。弘文堂：東京，pp. 43-70.
- 小林多寿子（2000）二人のオーサー。好井裕明・桜井厚編，フィールドワークの経験。せりか書房：東京，pp. 101-114.
- McPherson, B.D. (1986) Socialization theory and research: Toward a “New Wave” of scholarly inquiry in a sport context. In: Rees, C.R. and Miracle, A.W. (Eds.) Sport and social theory. Human Kinetics: Champaign. pp. 111-134.
- 三井さよ（2006）感情労働。船津 衛編，感情社会学の展開。北樹出版：東京，pp. 51-65.
- 野口裕二（2013）親密性と共同性—「親密性の変容」再考—。庄司洋子編，親密性の福祉社会学。東京大学出版会：東京，pp. 187-203.
- 齋藤純一（2008）政治と複数性。岩波書店：東京，pp. 195-196.
- 崎山治男（2005）「心の時代」と自己—感情社会学の視座。勁草書房：東京，pp. 143-232.
- 桜井 厚（2002）インタビューの社会学。せりか書房：東京。
- 庄司洋子（2013）ケア関係の社会学—家族のケア・社会のケア—。庄司洋子編，親密性の福祉社会学。東京大学出版会：東京，pp. 1-20.
- 高谷 幸（2009）脱国民化された対抗的公共圏の基盤—非正規滞在移住労働者支援労働組合の試みから—。社会学評論，60(1): 124-139.
- 高谷 幸（2012）〈親密圏〉の構築—在日フィリピン人女性支援 NGO を事例として—。社会学評論，62(4): 554-570.
- 上野千鶴子（2009）家族の臨界—ケアの分配公正をめぐる。牟田和恵編，家族を超える社会学。新曜社：東京，pp. 2-26.
- 渡 正（2012）障害者スポーツの臨界点—車椅子バスケットボールの日常実践から—。新評論：東京。
- 山田 綾（2005）「新たな親密圏」をめぐる議論—フェミニズム視点からの批判的考察—。愛知教育大学研究報告，54（人文・社会科学編）：179-187.
- 吉田 毅（2001）競技者の困難克服の道筋に関する社会学的考察：主体的社会化論を手がかりに。体育学研究，46: 241-255.
- 吉田 毅（2006）競技者の転身による困難克服の道筋に関する社会学的考察：元アメリカ杯挑戦艇クルーを事例として。体育学研究，51: 125-138.
- 吉田 毅（2009）後天的身体障害者のスポーツへの社会化の諸相—車椅子バスケットボール男子選手を事例に—。東北工業大学紀要Ⅱ人文社会科学編，29: 47-56.
- 吉田 毅（2012）競技者の現役引退をめぐる困難克服プロセスに関する社会学的研究：車椅子バスケットボール競技者へのキャリア移行を遂げた元Jリーガーのライフヒストリー。体育学研究，57: 577-594.
- 吉田 毅（2013）競技者のキャリア形成史に関する社会学的研究—サッカーエリートの困難と再生のプロセス—。道和書院：東京。

（平成26年2月10日受付）
（平成26年7月3日受理）